

ムラサキオカヤドカリ（甲殻類，異尾類）の越冬個体を京都大学 瀬戸臨海実験所“南浜”で 2012 年春に再発見

久保田 信

Rediscovery of hibernated specimens of *Coenobita purpureus* (Crustacea, Anomura)
in spring in 2012 at “Minamihama beach” of the Seto Marine Biological
Laboratory, Kyoto University

Shin Kubota

京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所 (〒649-2211 和歌山県白浜町 459)

はじめに

和歌山県西牟婁郡白浜町白浜半島の先端付近に所在する京都大学瀬戸臨海実験所の構内やその近隣区域で（東端は雑賀屋レストランまで）、多数（少なくとも 238 個体）のオカヤドカリ類が 2011 年に出現した（久保田, 2011, 未発表）。番所山では季節によっては夜間でなくても出現したが、ほとんどの調査場所では夜に出現することが多かった（久保田, 未発表）。オカヤドカリ類は冬季になると、1 個体も現われなくなった。そこで、今年の 2012 年は、本種がいつ頃からどこに出現してくるのか瀬戸臨海実験所周辺区域で調査した。その結果、4 月下旬になって、1 箇所だけで初出現したので記録する。

方法

2012 年 1 月 11 日夜から 2012 年 4 月 25 日夜までの期間中、月数回、できるだけ同日の午前、午後、夜に 4 箇所て本種の出現を目視調査した。4 箇所は調査範囲が異なり、番所山遊歩道（南方熊楠館登り口から灯台を経て塔島へ降りる小道）が調査範囲が一番広い：1. 瀬戸臨海実験所“南浜”の西側の岩場、2. 不動明王の洞窟周辺、3. 水族館出口付近、4. 番所山の遊歩道全体。

結果と考察

調査した 4 箇所へのオカヤドカリ類の出現状況をまとめると、以下の通りである。数値は、出現回数/調査回数で、0 は記入しない。空欄は調査しなかったことを示す。

“南浜” 不動明王 水族館 番所山				
	洞窟周辺	出口	遊歩道	
1 月 午前	2	2	2	10
午後		2	2	10
夜		1	1	
2 月 午前	2	2	2	10
午後	3	3	3	10
夜	3	3	3	
3 月 午前	1	1	1	10
午後	2	2	2	10
夜	2	2	2	
4 月 午前	3	3	3	10
午後	3	3	3	10
夜	2/4	4	4	

2012 年は、4 月 23 日になって、やや大型で、数年は生きていと推定できるムラサキオカヤ

ドカリ *Coenobita purpureus*（紫色で、掴んだらギューギューと鳴けるほど活力がある）をはじめ、数才と推定されるオカヤドカリ類が計6個体、南浜のみで出現した。これらの宿貝の種類は、下記に示す様に、個体ごとに異なっており、オカヤドカリのサイズも各々の貝の大きさにみあって異なっていた。貝殻から大きくはみ出した個体はいない。以下に貝殻の大きいものから挙げるが、ガンゼキボラ（子どもの握り拳サイズ）に入っていた個体を除く5個体は、2011年に貝殻にペイントでマークしたもので、1-4回出現した個体であった。

4月23日夜に出現したオカヤドカリの宿貝

- カコボラ（5回目の出現）；
- ガンゼキボラ（1回目の出現）；
- サザエ（2回目の出現）；
- シオボラ（4回目の出現）；
- テツボラ（3回目の出現）；
- スガイ（5回目の出現）

4月24、25日の夜もオカヤドカリは不動明王洞窟付近と水族館出口には出現しなかったが、南浜には24日に2個体が出現した。宿貝は23日のものと全く違っていたが、24日出現の2個体は昨年4回出現していたことがマーキングからわかった（図1）。

4月24日夜に出現したオカヤドカリの宿貝

- キイツブリ（5回目の出現）；
- イボニシ（5回目の出現）

25日夜はマーキングしていないイボニシに入って出現した。なお、4月23、24、25日の20時

の気温は、それぞれ18.5℃、19.4℃、20.9℃であった。



図1. 2012年4月24日夜に瀬戸臨海実験所
“南浜”に再出現した（今回で5回目）
2個体のムラサキオカヤドカリ

2012年に初出現した4月23日から約3日間、番所山を除く3箇所（午前中・午後・夜（20時前後））の時間帯に繰り返し調査した結果、日の入り後の数時間後に南浜だけに出現することがわかった（23日の真夜中の23:11には不在）。これらは、どこかで冬眠していたものが4月下旬に目覚めたものと推察される。今回、“南浜”の岩場に、昨年のように、夜間に出現したものの、そのあたりが越冬場所になっているかどうかは判断できない。

2012年4月24日夜に出現した2個体のムラサキオカヤドカリの貝殻に、発見捕獲して約1日後の25日の日の入り直後（18時半）に新たにペイントを吹き付け（シンナー系）、あらかじめよく乾燥した（数年間）様々な種類の貝殻を入れたバケツに各々独立に収容したところ、丁度2時間後に新しい貝殻と交換した。この行動は、ペイントをスプレー直後には殻を交換し

なかったので、ペイントのシンナー臭やその毒性を嫌がったのではなく、海産ヤドカリ類のように「宿貝にいつも不満をもっている」ので交換したと推察される（それから 20 分後に、1 個体は 5 色にべったり色を付けた元のキイツブリ貝殻にもどり、続いてまた同じお気に入りの新たな貝殻に入った： 20 時 30 分に観察完了）。2011 年度の同じ方法によるマーキングでも、死亡したり、吹き付けを嫌がって宿貝からすぐに抜け出る個体は極めて少数だった。

謝辞

オカヤドカリの同定をして下さった駒井 智幸博士と朝倉 彰博士に深謝致します。

引用文献

久保田 信. 2011. オカヤドカリ類（甲殻類、異尾類）の幼体を京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”で 2011 年秋季に再発見. 京都大学瀬戸臨海実験所年報, 24 : 49-50.